

Q&A

Q1. 生徒の活動の様子を写した講演資料の中で、付箋を使って考えを整理している場面がありました。色違いの付箋を使っていましたが、何か意味がありますか？

A1. 付箋の色分けについては、今回は特別な意味はありません。「男女」などの属性の違いによる影響を比較してみたいときに色違いの付箋に記入させる等、工夫次第で様々な応用が可能かと思えます。

Q2. 本校では探究学修の設定は難しい。今回の発表のような、高校生を対象とした講座などを開いていただければ、積極的に参加させていただきたいと考えていますので、そのような機会があれば声をかけていただくと助かります。

A2. 今回紹介したような形で高大接続を実質化していくことは非常に重要であると考えております。今後も機会を見て、大学と高校双方の教員が協働する形での講座設計および実施について検討を進めて参ります。

Q3. 探究型学習に関連し、(株)進研アド様のご講演の中で、ルーブリックのご紹介がありました。参考に全体を見せていただくことはできますか？

A3. 七尾高校の例は

www.ishikawa-c.ed.jp/~nanafh/sshhp/ssh/image/2016unit.pdf で、

また佐野高校の例は

<https://classi.jp/case/case7/> にて

一部ですが確認できます。参考にさせていただければ幸いです。

Q4. 七尾高校のミニ課題研究について、対象学年、実施期間、メンバー構成等について教えてください。

A4. 七尾高校の例は

www.ishikawa-c.ed.jp/~nanafh/sshhp/ssh/image/2016unit.pdf で

一部ですが確認できます。参考にさせていただければ幸いです。

Q5. 創生学部の面接では、生徒が高校までに取り組んできたこととこれから大学でやりたいことと重視されるのはどちらでしょうか？

A5. どちらも話題に出る可能性があります。これまでに取り組んできた内容について、出身高校の諸活動への対応状況が生徒個人の評価に反映するのは、公平性の観点から問題があると考えております。従いまして創生学部の面接では、本人の学修や課題解決への意欲や資質を総合して判断しており、高校までの取り組みの多寡は必ずしも重要視されるものではありません。

- Q6. 2年次からの領域学修パッケージは、全員が希望通り選択できるのでしょうか？パッケージで人数に偏りが出た場合、3年次以降のゼミ活動でも偏りが出る可能性が考えられると思いますが、その場合でも問題はありますか？
- A6. 領域学修パッケージには定員を設けておりますので、場合によっては第1希望通りではない場合も生じます。1年生の第2学期を通じて、各パッケージや領域での学修について理解を深める取り組みをしておりますので、第2希望の場合も、その領域の自分のテーマなどへの繋がりを理解し、意欲的に学んでいます。なお、一期生の場合は、ほとんど第1希望通りでした。3年次以降のゼミ活動についても、学生の理解を深めつつ配属を決めていく予定です。
- Q7. 酒田東高校のような取り組みを同様な規模で実施する場合のタイムスケジュール（事前の打ち合わせの時期、回数、費用など）をお教えてください。
- A7. 創生学部の教員数も多くはありませんので、当方が中心で頻繁に実施することは困難な状況です。高校の先生方と協働して実施させていただければと存じます。内容などにつきましても早めに打ち合わせさせていただき、双方での準備が必要と考えています。高校様の年次計画もあると思いますので、前年度中からの打合せが必要になると思います。回数や費用につきましては、それぞれの高校の事情によると思いますので、打合せの中で整えていければと考えております。
- Q8. 探究と調べ学習の線引きはどこにあるのでしょうか？
- A8. 明確な線がある訳ではないと思いますが、本学部では、課題解決に繋がることを意識した、可能な限り学生や生徒の内発的な動機づけに基づく取り組みを探究と呼びたいと考えております。
- Q9. 探究型学習を実施していますが、いわゆる文系の探究テーマや進め方に難しさを感じています。科学とは根拠に基づき、論理的に考え、結論を導く一連のプロセスと思いますが、文系で根拠は調べることはできても、実験は難しい場合が多くあります。また、評価も難しいと感じます。
- A9. ご指摘の通り、どうしても実験などを行い、深め、研究活動に繋げる自然科学系的な活動を探究と言う場合が多いと思います。しかしながら社会的な（文系的な）課題解決に繋げるための調査、分析も、広げるべき探究活動の一つと考えます。本学部であれば、人口問題などの社会的課題について、いかに多面的に課題を分析し、それらを総合的に扱って課題解決を提案出来たかということも一つの指標になります。確かに評価は難しく、高校生でどの程度まで期待するか、それを大学でどれだけ伸ばせるかについてなど、このような連携の場で議論を重ねていく必要があると考えております。
- Q10. 今年度中に出前講義をお願いすることはできますか？
- A10. 日程によっては可能な場合もあるかと思えます。是非お問い合わせください。